

CONTENTS

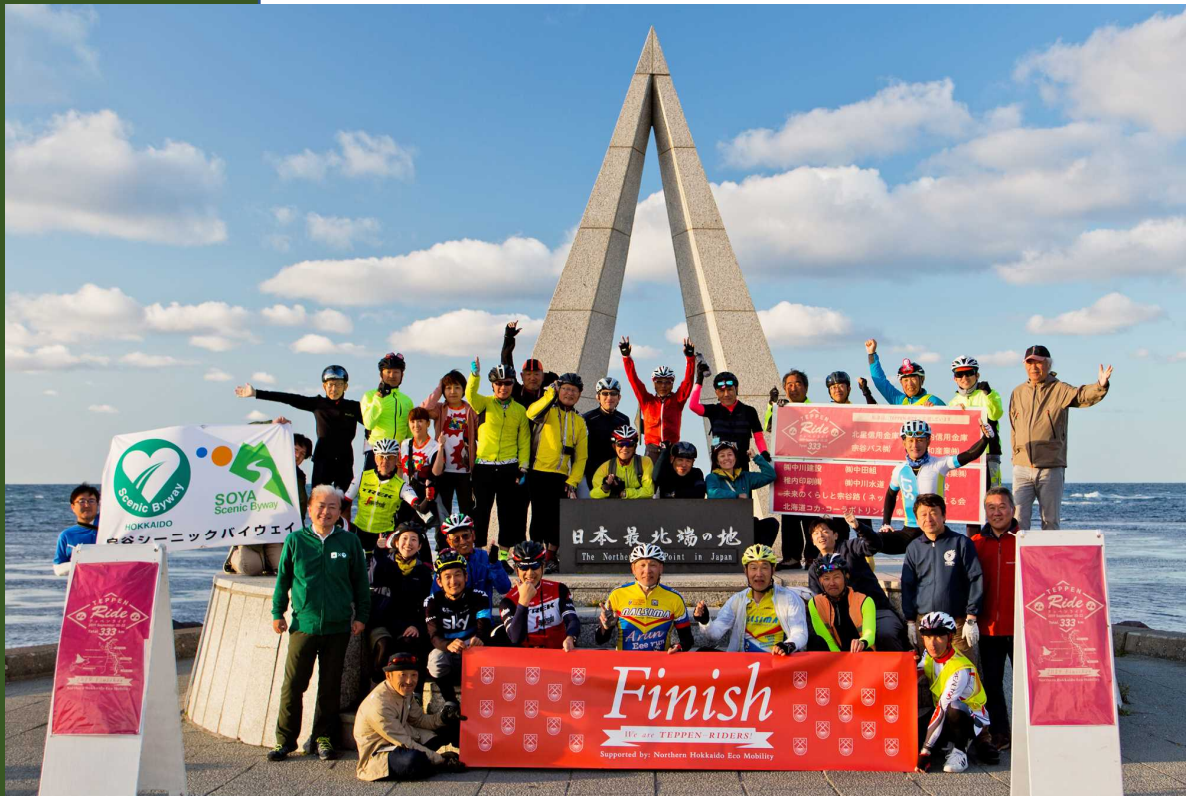
▼オピニオン

- ・互いに「気づく」コンテスト：青木優介
- ・地域住民の土木リテラシー向上へのアプローチ：長谷川雄基

CNCP通信

VOL.89／2021.9.5

■今月の土木■



●てっぺんライド（宗谷岬のゴール風景）

▼コラム

- ・わかり易い土木16（河川）「かわまちづくり」支援制度：内藤正彦

▼フレンズコーナー

- ・“まち”と“地域”の衰退は、風景に現れる：原文宏

▼メッセージ

- ・プラットフォーム上のプロジェクト支援（案）：田中努

▼事務局通信

■シーニックバイウェイ北海道

(Scenic Byway Hokkaido)

・北海道では、“みち”をきっかけとして、**地域の方々が主役**となって、行政や企業などと連携しながら、**広域的に「美しい景観づくり」「活力ある地域づくり」「魅力ある観光空間づくり」**に取り組んで、**愛着と誇りの持てる地域**の実現を目指す「シーニックバイウェイ北海道」が2005年にスタートし、北海道各地で多様な活動が継続的に展開されています。

・“Scenic Byway”とは、風景の良い (Scenic)、わき道・寄り道 (Byway) を組み合わせた造語です。シーニックバイウェイは、北海道で先駆的にはじまり、現在は「日本風景街道 (Scenic Byway Japan)」として全国に広がっています。(原文宏)

▼フレンズコーナーに続く。



●今月のフレンズは、

土木学会インフラパートナー団体の仲間です。



インフラパートナー
JSCE 土木学会

▼オピニオン：インフラテクコンから広がる社会 互いに「気づく」コンテスト

木更津工業高等専門学校
環境都市工学科
青木 優介



何よりも、この大変な状況の中で、高専の学生たちに貴重な機会をご提供いただいた関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

本校からは、専攻科2年の男子学生3名によるチーム「NITKCs」、本科5年の女子学生4名によるチーム「c.Moai」の2チームが参加させていただきました。NITKCsの提案は、「木更津市における冠水情報通知システム」ということで、本校が所在する千葉県木更津市における道路冠水状況を同市が展開している情報伝達用のスマートフォンアプリで運転者に通知するとともに、その通知訓練などを通じて市民の防災意識の向上を図ろうとするアイデアでした。一方、c.Moaiの提案は、「街灯の色を利用した避難警告の周知」ということで、千葉県木更津市の金田地区を対象に、水害時の避難情報を街灯の色の变化で住民に周知しようとするアイデアでした。幸いにも両チームとも最終審査に進出でき、NITKCsには優秀賞ならびに企業賞（奥村組様、東日本旅客鉄道様）、c.Moaiには企業賞（東日本旅客鉄道株式会社様、古河電気工業様）を授与いただきました。



写真-1 優秀賞を受賞した
チーム NITECs のメンバー

担当教員として今回のコンテストを振り返りますと、学生たちは今回、「世の中は、思っていたよりも複雑」ということに気づけたのではないかと思います。様々にアイデアを検討したようですが、その度に「人」「費用」「管理と責任」の壁が立ち上がることに、気づいたのではないかと思います。こういったことはアイデアをアイデアで留めるのではなく、実際の社会に実装しようとしてはじめて気づけることなのかもしれません。個人的には、学生たちがこういった気づきを経験することで、今後、自らのインプットを深化させ、アウトプットを実践的にすることを期待します。一方、こういった思念を過度に感じさせると、社会に対する委縮や諦めを生み出しかねないようなにも思います。このあたり、担当教員としてもバランスをとっていなければならぬと感じております。

なお、参加者の一人として他チームのアイデアも拝見させていただきました。本校のチームと同様にICT技術等を活用しつつ、地域の人々と協働するアイデアが多く提案されていました。なお、私の個人的な感覚では、インフラ整備といえばハード面の技術、そして、トップダウンが基本ではと。ただ、慢性化する人手不足、膨大な数の既設構造物・・・何より、インフラ整備の本来の姿とは地域の人々と協働して行うことでは・・・と考えたとき、学生たちの方が適正な考えを持っているのではと気づかされました。しかしそれでも、「人」「費用」「管理と責任」の壁が立ち上がることは避けられません。今後も様々な状況を踏まえたうえで、最適解を見出せる人材の育成が望まれるのだと思います。その環境整備を担う一教員として、彼らの考えに触れる今回のような機会を大切にしなければならぬと思いました。

「インフラテクコンから広がる社会」。月並みですが、参加した学生も、その提案を受けた私たちも、それぞれに何か気づく。それはいずれ社会にとって本質的な効果をもたらすかもしれません。今後も、本コンテストのますますの発展を祈っております。

▼オピニオン：インフラテクコンから広がる社会 地域住民の土木リテラシー向上へのアプローチ ～低学年のインフラテクコン挑戦～

香川高等専門学校 建設環境工学科 助教
長谷川 雄基



1. はじめに

R02 年度に初開催されたインフラテクコンですが、香川高専からは、「雄風」チームが参加しました。本チームは、1、2年生のみの男子4名と女子2名の計6名という構成でした。他高専と比較すると、メンバーが1、2年生の低学年のみ、機械系の学科からも2名参加、というところが、本チームの特色であったように思います。実は本チームのメンバーは、もともとはインフラテクコンのために集ったわけではありませんでした。香川高専では、1～3年生を受講対象とした選択科目として、「プレ研究」という科目があります。この科目は、地域の企業や自治体と連携して、学生がチームを組んで課題解決を行うという主旨で、2018年よりスタートしました。この科目では、受講希望者に対して、担当教員が取り組むテーマをプレゼンするのですが、その時点では、私からは、「地域の土木技術者を対象とした講習会等で使用するためのコンクリート教材を開発する」というテーマで参加希望者を募りました。上記の6名はこのテーマに興味を持ち、集ったメンバーでした。しかしながら、進めていくうちに、どうしても専門的な知識・技術が必要となるコンクリート教材の作製では、学生が単なる作業員になってしまうケースが多く、折角集まってくれた学生たちに対してこのままでは……と思案していました。そんな折、インフラテクコンの開催が発表され、参加してみようか？という話となりました。

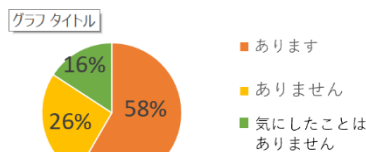
2. インフラテクコンの発表内容

参加するにあたって、どのような内容を検討していくのか、学生同士で何度も意見交換を行いました。議論をしていくうちに、そもそも本人たち自身が、まだ「土木」というものを十分に理解できていないということに気づき、きっとこれは一般の人たちにも共通することだろうという考えに至り、「地域住民の土木リテラシーを向上させるためにはどうすればよいのか？」という出発点にたどり着きました。ここからは、学生同士で手分けして、各々が土木に関する様々な課題を調査していきました。その過程で、事前に右記のようなアンケート調査を行い、同世代の友人たちの「土木」に関するイメージ等を調査しました(図1)。

土木リテラシーの向上に向けて香川高専内やインターネット上などで土木に関するアンケートを実施した。

予想では道で気になるところがある人は少ないと考えていたが我々の予想とは少し外れた、理由としてインターネット上での主な回答者が偏ってしまった(土木に関する知識が一定以上あった人が答えた)と考えられる。

Q1:通学路やよく使う道路で気になる(壊れている・見えにくい等)ところはありますか



Q2:Q1で「ある」と答えた人でどんなことが気になっていますか？



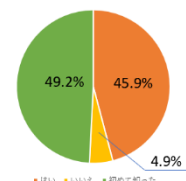
Q3:よろしければ気になることを具体的に教えてください。

- 道路の割れ目から草が生えている
- トラックなどの交通量が多くなお右折や左折が多いのですり減りが早くコンクリートが割がれてしまいます
- 雨が降ると、道路に大きな水たまりができる

Q4:よろしければ「土木」についてのイメージについて教えてください

- 緑の下の力持ち
- 3K
- 大変そう

Q5:道路や橋は、掃除をするだけで長持ちします。知っていますか。



回答者数 123人
アンケートの主な回答者
学校内の織友
中学時代の友人
Twitter(<https://twitter.com/CivilEngnaring/status/1311261801078689792?s=20>)

図1 事前アンケート

また、意見交換においては、地域で建設業に携わる(株)Soraniの代表取締役 水本氏にも参加いただき、学生は技術者の生の声を聴くとともに、ディスカッションの手法等についても学ぶことができました。学生たちは、現在の土木が抱える

課題について、以下のように整理しました。

- ①土木についての知識が少ないゆえに、環境を破壊するのではないかなどの漠然とした不安を土木に対して抱いている住民がいる。
- ②土木構造物の目的とその性能限界を知らないために、災害の時に逃げ遅れる。
- ③土木構造物の老朽化が進んでいる。
- ④土木への関心が低いため、住民要望を政治や選挙に反映させることができず、適切な政策がなされていない。

これらの課題は、①土木に対して関心がなく、そのため知識がない、②土木に関わる機会がないため土木を身近に感じない、の二つが原因であると考えました。これらの課題解決として、土木リテラシーを住民一人一人が持つことが重要であると考え、様々なアイデアを検討していきました。ここで、土木リテラシーは、「土木のことを正しく理解・解釈し、行動することができる能力」と定義しました。この時点では意図したわけではありませんでしたが、最終的には、新技術の開発などのようなハード面ではなく、リテラシー向上というソフト面に注目したことが、他チームとの差別化になっていたように思います。

具体的な手法・アイデアとしては、以下を考えました（図2）。

A) 【興味・関心を惹きつける】

イベントを行う。→ ダムのライトアップ、子供たちによる橋のカラー塗装、*マイシティレポートの宣伝、など。

B) 【土木について大まかに理解・認知する】

一般市民たちでできることをしてみる。→ チェックシートを利用した橋の点検、道路模型の作成、マイシティレポート、など。

C) 【リテラシーの向上】

マイシティレポートの適切な運用
<Goal>

イベントを通して土木リテラシーへの興味関心を持った人が家族や友達などの身近な人との会話のなかで話題を出してもらい、土木・インフラへの知識の向上や定着を図る。

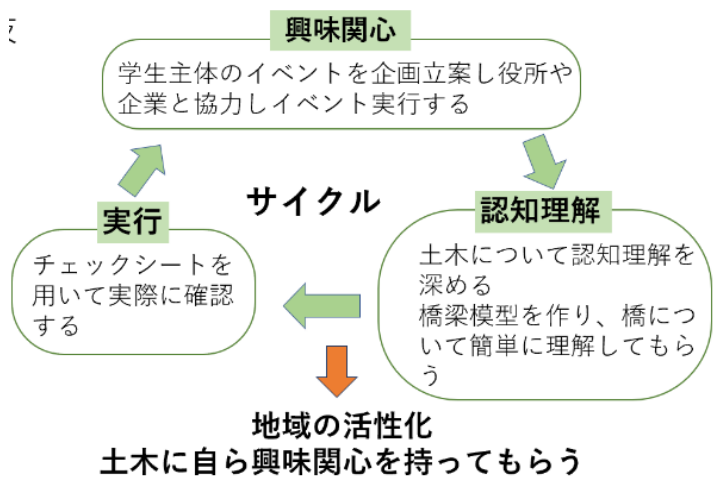


図2 土木リテラシー向上に向けたサイクル

*マイシティレポート：高松市内のさまざまな課題を市民と行政の間で共有するスマートフォンアプリ
<https://www.city.takamatsu.kagawa.jp/kurashi/kurashi/sodan/kouhou20201001.html>

3. おわりに

今回の発表内容では、アイデアを取りまとめるところまではできましたが、実際に行動に移すのは時間的な制約からできませんでした。しかしながら、アイデア出しには指導教員はほとんど関与せず、学生のみ、それも冒頭に述べたように1、2年生の集まりでここまで取りまとめることができたのは学生たちの努力の結果だと思えます。アイデアについては、どちらかといえば、新規で何か目新しいことをするというよりは、すでにあるけど十分に認知されていないものや、十分に使いこなされていないものを利用していくという点で、新規性は低いと思われそうですが、実現可能性は確保できているのではと思っています。本チームは昨年度いっぱい解散して、現在は一部のメンバーが残り、新たなチームを検討しつつ、昨年度実現できなかった「実際に行動に移す」ということについて動き出しています。

土木を専攻する教員の立場としては、学生たちが土木について改めて考えるきっかけになったという点で、今回のインフラテクコンへの参加は有意義な機会になったと思っています。また、それだけではなく、今回の取組みを通して、1、2年生という低学年の集まりのなかで、学生たちが会議手法や情報の検索方法、他者とのコミュニケーションの取り方、プレゼンの能力、などなど上げだせばキリがないほど多くの学びを得ていた姿に非常に嬉しさを持ちました。今回は初めての開催でしたが、高専生のために新たにコンテストを立ち上げ、運営して頂いた事務局の方々、その他関わってくださった多くの方々やYoutubeで動画を閲覧して頂いたの方々などにこの場をお借りして、厚く御礼申し上げます。

コラム

わかりやすい土木 第16回 河川の話
「かわまちづくり」支援制度国土交通省 水管理・国土保全局
河川環境課長

内藤 正彦



穏やかな日々の「かわ」は、古くからの歴史・文化や固有の景観、観光資源など内包しています。それを活かして「かわ」と「まち」が融合し地域の活力となる拠点・空間形成を目指す「かわまちづくり」について紹介します。

1) 「かわまちづくり」(略称「かわまち」)とは

毎年のように夏場の猛烈な大雨と水害の報道を目の当たりにしていると、「かわ」は脅威をもたらす存在であることが印象づけられますが、一方で、「かわ」(河川・水辺)にまつわる歴史、文化や景観を育み、観光やレジャーの拠点となるポテンシャルがあります。その「かわ」のポテンシャルを上手に活かして「まち」と融合し、拠点や空間を形成して持続可能とする取組を「かわまちづくり」と呼んでいます。

2) 事例紹介 (Web サイトは <https://www.mlit.go.jp/river/kankyo/main/kankyou/machizukuri/map.html>)

「かわまち」やその支援を円滑に進めるため、推進主体(市町村、協議会など)が計画を作って国土交通省に登録して頂いています。2009年に創設して2021年までに全国で244地区が登録されていますので、かわまち大賞を受賞した事例を中心にいくつか紹介します。

○京橋川オープンカフェ (太田川水系京橋川、元安川ほか、広島県広島市)

- 地元産の新鮮な魚介類や野菜など、こだわりの料理をまちなかで川風を感じながら楽しめます。
- 河岸の夜のイルミネーションも美しく、広島の新しい人気スポットとなっています。



(水辺のオープンカフェの様子)



(地元の産品を使用したこだわりの料理)

○やすらぎ堤 (新潟県新潟市、信濃川)

- 民間企業の意欲的な参加により、かわまちづくりに参加するメリットを体現し、新たな観光スポットとなることで経済的な成果に繋がっています。
- 民間事業者が主体的に運営する模範的なモデルとなり、社会実験の実施、地元の受入体制、周辺環境整備などにより持続的に深化しています。



(信濃川やすらぎ堤の全景)



(水辺のアウトドアラウンジの様子)

○東京ミズマチ (東京都墨田区、荒川水系北十間川)

- 民間企業の積極的な参加により、官民が連携して水辺の利活用を考えた工夫あるハード整備を都心部に実現しています。
- 行政、民間事業者、地元町会・商店会など様々な事業者が「Design Guideline」を設定し、地区全体のデザインの指針としてまとめて共有し、一体的空間を実現しています。

▼フレンズコーナー

“まち”と“地域”の衰退は、風景に現れる

一般社団法人シーニックバイウェイ支援センター 代表理事
 特定非営利活動法人日本風景街道コミュニティ 理事
 一般社団法人北海道開発技術センター 理事/地域政策研究 所長

原文宏



■なぜ、「風景・景観」なのか

16年目を迎えるシーニックバイウェイ北海道は、現在、指定ルート13（日本風景街道登録）、候補ルート3（指定に向けて準備活動を進めているルート）に拡大しており、400以上の参加団体が活動しています。

ここからは、私見です。シーニックバイウェイ北海道の活動の3本柱は「風景・景観」「観光」「地域づくり」ですが、基本は「風景・景観」だと考えています。「風景・景観」を守り、育てて、活用することが、結果として観光振興や地域づくりに繋がると確信しています。

なぜかという、風景や景観には、その地域の人々の暮らし、活動、気遣いが現れるからです。例えば、私が、見知らぬ外国の地を旅していて、落書きやごみが散乱している風景をみたら、治安が悪いのかな？と思いますし、その地域が楽しそうとも感じませんから、そこに滞在したいとも思わないでしょう。

また、北海道の美瑛や富良野地域は、農村景観が美しいということで、多くの観光客が訪れますし、移住者する人も少なくありません。この農村景観を創っているのは農業者ですが、おそらく農業者は美しい風景を創ろうと思って農業をしていないと思います。もし、農業者が離農して、後継者もいなくなったら、”パッチワークの丘”といわれる美しい農村景観が、荒地のパッチワークになってしまい、観光地や移住先としての魅力も失われるでしょう。景観を守ることは、農業を守ることとイコールなのです。

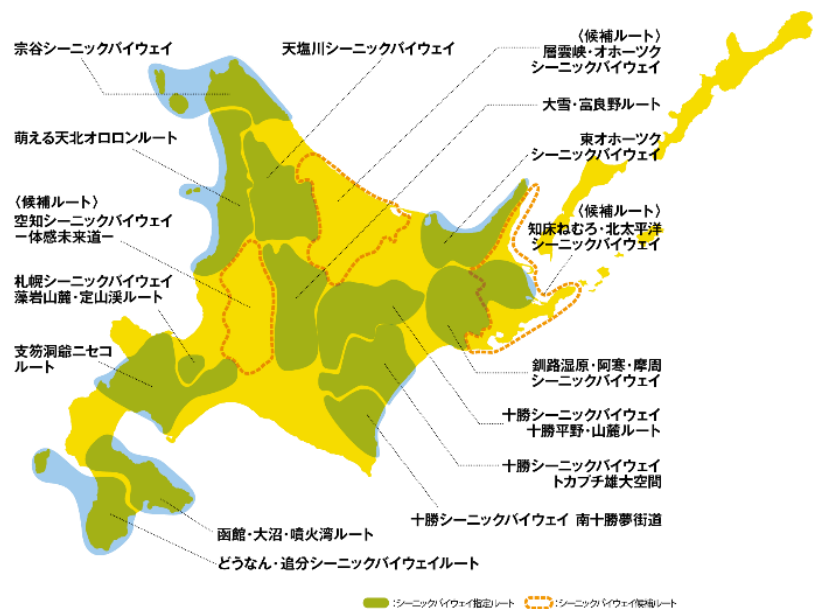
ですから、風景・景観を守ること、育てること、活かすことが、観光や地域づくりにとって、とても重要だと考えています。

■最近、私が、特に関心をもっている活動

全道で展開されるシーニックバイウェイ北海道の活動は、多種、多様です。全てを紹介することはできませんので、私が最近、特に関心を持っている活動をいくつか紹介したいと思います。各ルートの特徴や活動報告は、以下のホームページを参照ください。

【シーニックバイウェイ北海道推進協議会】

https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/kn/dou_kei/ud49g7000000nOut.html

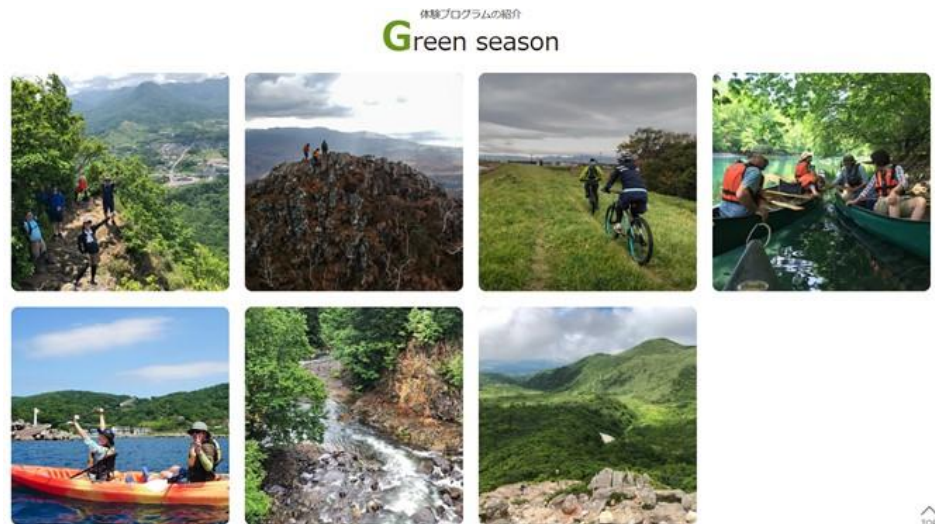


● シーニックバイウェイ北海道の指定ルートと候補ルートのエリア（令和3年8月現在）

1) アドベンチャートラベル

世界観光機関（UNWTO：World Tourism Organization）の定義では、アドベンチャートラベル（Adventure Travel：AT）は、「自然との触れ合い」「異文化交流」「身体活動」の3要素のうち、少なくとも2つを含む旅行形態と定義されており、将来、大きなマーケットとなることが予想されています。

（一社）シーニックバイウェイ支援センターでは、札幌シーニックバイウェイ藻岩山麓・定山溪ルートや支笏洞爺二セコルート等と連携して、札幌市と周辺地域をフィールドに、魅力ある様々なアクティビティと歴史・文化、芸術、食などを組み合わせた、札幌を起点とした「日帰り」もしくは「1泊2日」程度の期間で楽しめる「1 Day アドベンチャー・プログラム」の開発を行っているほか、道北や道東のシーニックバイウェイでも、アドベンチャートラベルの取り組みが活発化しており、シーニックバイウェイと親和性が高く、新たな北海道の魅力となる観光プログラムと考えています。



●札幌アドベンチャーライフ HP 【Sapporo Adventure Life】
<http://sapporo-adventure.jp/index.html>

2) 学校シーニックバイウェイ

十勝シーニックバイウェイ「南十勝夢街道」では、継続的な地域活動を行うためには、地域づくり人材の育成が重要という課題認識のもと、地域の小学校と連携して授業の中で、地域活動を生徒とともに学習する取り組みを平成22年から継続しています。

いわゆる「出前授業」として、生徒にシーニックバイウェイ活動の思いを伝え、生徒と一緒に地域のおすすめ情報を話し合い、その情報をまとめてマップを作成したり、モニターツアーを行ったりしています。

ただ、学校現場では、英語やプログラミング教育などの新たな科目が増えているほか、新型コロナウイルス感染拡大による休校等により、授業時間数に余裕がなくなってきており、出前授業の実施が厳しい状況になっています。

そこで、現在、「NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム」等と連携して、学習指導要領に沿う形で、社会科や総合学習で学校シーニックバイウェイを展開することを検討しており、是非、実現したいと考えています。



●出前授業の様子（幕別町立忠類小学校）

3) シーニックの森（カーボン・オフセット）

シーニックの森（事務局：シーニックバイウェイ支援センター）は、シーニックバイウェイ北海道が推進するドライブ観光と、それに伴うCO₂排出増という問題を、観光客も参加してオフセットすることで解決を目指したものです。

現在、道内4箇所に「シーニックの森」を設置していますが、釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイ

ウェイルートが管理運営する「そらの森（弟子屈町）」と函館・大沼・噴火湾ルートが管理運営する「きじひき森林公園の森（北斗市）」が植樹活動の中心です。

平成 19 年のスタート当時は地球温暖化問題への関心も高く、オフセット取引等で民間企業の参加も期待されましたが、その後は社会全体の関心も低下し、シーニックの森も“緑化”を目的とした植樹が主体となっていました。

しかし昨年（令和 2 年）、わが国政府が 2050 年カーボンニュートラルを宣言したことで大きく状況が変わったと思っており、シーニックの森にも追い風と考えています。今後は、オフセット植樹だけでなく、木材の長期的な利活用も含めて、シーニックの森の仕組みを再考してみたいと思っています。



●第 5 回そらの森植樹祭の参加者による記念撮影

■シーニックバイウェイ「秀逸な道」

「秀逸な道」は、シーニックバイウェイ北海道の各ルートの中でも特に魅力的な景観等を有する道路区間です。選定された 12 区間、選定候補の 6 区間を対象として、観光資源としてさらに磨き上げ、その魅力を発信することでドライブ観光客等の誘客促進を目的としたプロジェクトです。

現在、ハッシュタグキャンペーンを実施しています。インスタグラムのシーニックバイウェイ公式アカウントをフォローした上で「#秀逸な道」をつけて写真を投稿すると秀逸な道ウェブサイトに表示されます。是非、北海道で「秀逸な道」をドライブして自分だけの秀逸な道を投稿してみてください。

【秀逸な道ハッシュタグキャンペーン】

<https://sbw-roads.sakura.ne.jp/share/>



●インスタグラムにより「秀逸な道」ハッシュタグキャンペーン

●私たちは、土木学会インフラパートナー団体の仲間です。



▼CNCP からのメッセージ

プラットフォーム上のプロジェクト支援（案）

シビル NPO 連携プラットフォーム 常務理事/事務局長
土木学会/シビル NPO 推進小委員会 委員長
メトロ設計(株) 取締役

田中 努



■令和3年度以降の新しい体制と活動

CNCP は、設立以来、中間支援組織としての活動のあり方を常に模索しつつ、近年は「土木と市民社会をつなぐ」ことをキーワードとして、事業を組み立ててきました。

一方、運営体制は当初の枠組からほとんど変わりなく継続してきましたが、活動の活性化のために世代交代も必要です。さらにコロナ禍で加速した WEB 会議・ウェビナーや SNS の活用など本格的な情報ツールの導入のためにも、若手メンバーの参画が必須となってきました。この様な社会情勢の変化に合わせて、必然的に CNCP のミッションも見直しを図っていく必要がありました。

そのため、昨年度上期に「令和3年度以降の新しい体制と活動」の方針を検討し、図1のような新たな組織と体制をまとめ、2/24 の令和2年度第2回理事会で承認されました。CNCP 通信 VOL.83（3月号）に、詳しく紹介しました。

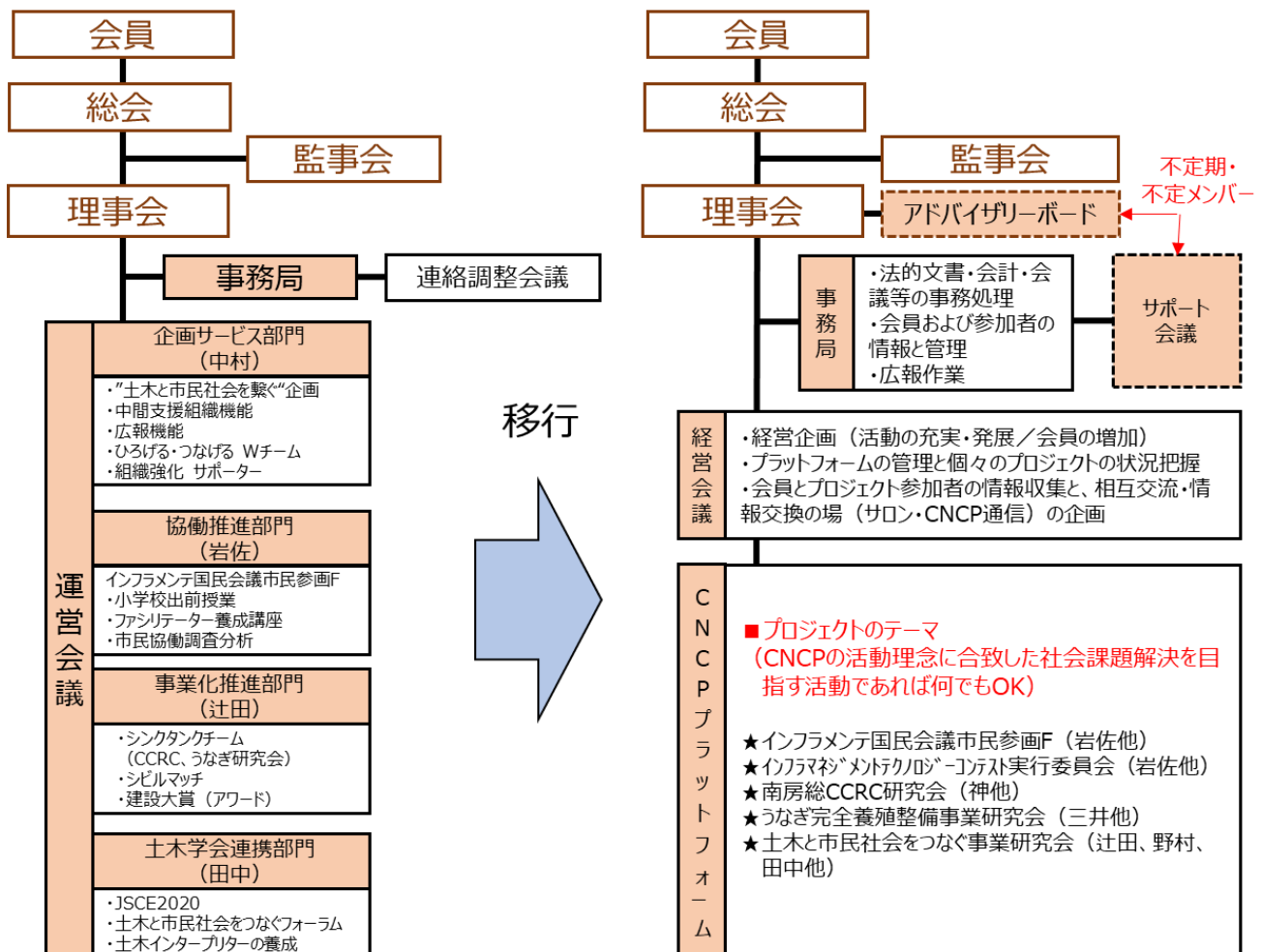


図1：新たな組織と体制への移行

図1の右下の「CNCPプラットフォーム」という所が、これからの皆さんの活動で、個々の「プロジェクト」という位置づけになります。その考え方を「プロジェクト支援規程(案)」としてまとめ、8/24の令和3年度第1回理事会で承認されましたので、以下にご紹介します。

CNCPは、これまで4つの部門を設けて直営的な活動をしてきました。しかしいろいろなNPOや団体と連携しながら中間支援をするのが元々の理念にありますし、CNCPの人材も必ずしも多くないことから、外の仲間と連携・協働しながら大きな活動にしていくことを考えました。それが「プラットフォーム事業(図1の右下のCNCPプラットフォーム)」で、今年度からこれを核にしていきます。CNCPの活動のマネジメントは、4つの部門ではなく、経営会議に集約する形としました。

下記の「プロジェクト支援規程(案)」は、図2のように、CNCP外の団体等から協働提案や支援要請があった活動(=プロジェクト)やCNCP内で企画したプロジェクトを、CNCPが経営会議や事務局等を通じて、支援する内容や方法の案を示してあります。

しばらく、走りながら具体事例に対応してブラッシュアップしていきますので、ご意見・ご要望を事務局までお願いします。

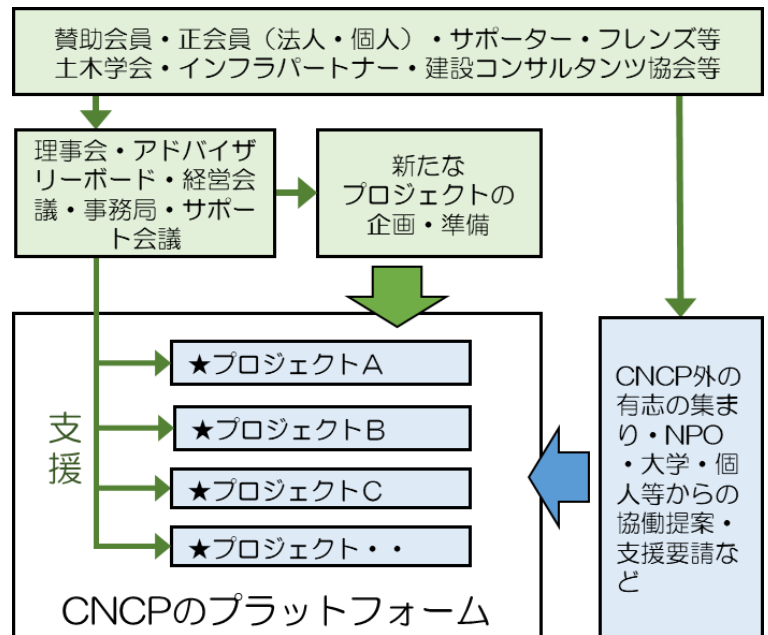


図2：プロジェクトとCNCPと外部との関わり

■CNCPプラットフォーム事業におけるプロジェクト支援規程(案)

第1条 プロジェクトの定義

シビルNPO連携プラットフォーム(以下「CNCP」という)は、中間支援組織として、定款第3条に示す目的と、「土木と市民社会をつなぐ」という趣旨に合致する様々な社会的課題の解決・改善に取り組む活動を、支援する。

CNCPは、それらが個々に活動する「場(=プラットフォーム)」を提供し、その上で、それぞれのグループに自立的な活動をしていただく。そのプラットフォーム上の活動を「プロジェクト」と呼ぶ。

第2条 支援の対象

CNCPの経営会議が支援すべきプロジェクトと認めた活動であれば、運営グループのメンバーが、CNCP内外の地域の自治体・NPO(法人・任意団体)・大学・企業・個人等を問わず、その活動を支援する。

第3条 支援のメニュー

CNCPは、このプロジェクトに対して、次の支援を行う。必要性和実効性を勘案しながら、徐々に拡大・高度化させていく。

いずれも、プロジェクトの運営グループからの申請を受けて、経営会議で審議し、支援の可否と程度などを決定する。

1) 中立でインフォーマルな「場」としての利用

自治体・学協会・企業等、フォーマルな「場」では実施しにくいテーマに関する勉強会等の活動拠点に利用できる。

2) 法人格の利用

プロジェクト運営グループの代表者名で、他団体への協力要請など、主催者として発信できる。

・例1：シビルNPO連携プラットフォーム ○○○研究会 代表 ◇氏名◇

・例2：シビルNPO 連携プラットフォーム ○○○実行委員会 代表 ◇氏名◇

3) 人的ネットワークの利用

CNCP 会員内の人的ネットワークや土木学会の委員会との連携を利用できる。

4) コミュニケーション・ツールの利用

CNCP からの情報発信（CNCP 通信/HP・Facebook 等の SNS）を利用できる。

5) 運営ノウハウの支援

NPO 設立のスタートアップの支援が受けられる。また、NPO 運営のブラッシュアップの支援が受けられる。

6) 経営資源の支援

原則として、活動の経営資源は、プロジェクト独自の募集と資金や収益で賄うが、CNCP 経営会議が共催として次の経営資源を支援することがある。いずれも経営会議における審議により、支援の可否・程度・金額・期間などが決定される。

- ・CNCP の会員・サポーター・事務局による人的支援。
- ・会議室・イベント会場・ZOOM 会議の手配等の物的支援。
- ・運営資金が不足する場合の「支援金」による金銭的支援。

第4条 支援金の貸付け

- 1) 運営資金が不足する場合の「支援金」による金銭的支援は、「貸付」として行い、1件当たり最大100万円まで、無利子で、原則として1年後の完済を前提とする。
- 2) 継続して支援金が必要な場合は、返済期限の前に、第6条に準じて、貸付の継続申請を行う。
- 3) CNCP 全体での支援金合計の予算枠を設ける。支援金合計は、CNCP の現金預貯金の1/5 または1年間の会費合計の1/2 の少ない方の金額以下とする。

第5条 プロジェクトの立ち上げ申請

プロジェクト立ち上げの申請は、「申請書」と共に、下記の書類（自由書式）を提出する。

- ・活動の目的
- ・活動の実施計画（内容・工程・予算・メンバーの名簿）
- ・CNCP の支援を必要とする内容と理由
- ・運営グループの会則等

第6条 プロジェクトの立ち上げ申請と決定の時期

- 1) プロジェクトの立ち上げ申請は、随時受け付けるが、年2回、5月末と11月末に受付を締めきり、定例の経営会議で審議する。必要に応じて、問い合わせやヒアリングを行う。
- 2) 8月の第1回理事会、または2月の第2回理事会で承認を得て、決定となる。

第7条 プロジェクトメンバーのCNCP 会員参加

プロジェクトの運営グループのメンバーは、次のいずれかの形で、CNCP の会員となる。

- ・運営グループの代表と他1名の計2名は個人正会員に、他のメンバーは個人正会員または（新）サポーターとなる。
- ・運営グループが既に任意団体の場合、およびそのグループの体制・活動が任意団体と見なせる状況の場合は、団体の代表者が法人正会員となる。

第8条 プロジェクトの運営

- 1) プロジェクトの運営グループは、四半期毎に、活動報告を提出する。
- 2) プロジェクトの活動報告は、CNCP 通信やHP・FBに掲載して、会員その他と情報共有を図る。
- 3) プロジェクトの運営グループから、CNCP の支援や他団体との連携・協働についての提案や要請がある場合は、経営会議・アドバイザーボード・サポート会議で、対応を検討する。
- 4) プロジェクトの運営資金と活動費は、プロジェクトの運営グループが独自に管理し、出納記録を作成・維持するが、現金の保管をCNCP に委託することも出来る。

以上

CNCPは、
あなたが参加し、
楽しく議論し、
活動する場です！

お問い合わせは下記まで

特定非営利活動法人
シビルNPO
連携プラット
フォーム

〒101-0054
東京都千代田区神田
錦町三丁目13番地7
名古屋ビル本館2階
コム・ブレイン内
事務局長 田中努：
cncp.office@gmail.com
ホームページ URL：
http://npo-cncp.org/

▼事務局通信

■8月の実績

●第89回経営会議

開催日・場所：8月10日（火）Zoom会議

議題：①理事会・総会準備／②各部門からの活動報告

●R2年度監事監査

開催日・場所：8月17日（火）ソレイユ入谷ビル内

議題：R2年度監事監査

●令和3年度第1回理事会

開催日・場所：8月24日（火）Zoom会議

議題：①R2年度事業報告／②R3年度事業計画／③定
款変更／④理事改選他

■9月の予定

●第90回経営会議

開催日・場所：9月14日（火）Zoom会議

議題：①総会準備／②3事業の計画の具体化

■現在の会員数

賛助会員29／法人正会員13／個人正会員31／合計73
／サポーター125

●CNCPの活動には下記の賛助会員の皆さまのご支援をいただ
いています（50音順・株式会社等省略）。

アイ・エス・エス／アイセイ／安藤・間／エイト日本技術開発
／エヌシーイー／奥村組／オリエンタルコンサルタンツ／ガイ
アート／熊谷組／建設技術研究所／五洋建設／シンワ技研コン
サルタント／スバル興業／セリオス／第一復建／竹中土木／鉄
建建設／東亜建設工業／東急建設／ドーコン／飛鳥建設／土木
学会／西松建設／日本工営／パシフィックコンサルタンツ／フ
ジタ／復建エンジニアリング／復建調査設計／前田建設工業
（以上29社）

